

上原 美術館 通信

No.
9

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2020年4月10日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



昨年秋、上原美術館は、新たに平安時代の二天像を収蔵しました。今年度最初の「上原コレクション名品選3」では、仏教館にて、この新収蔵の二天像を初公開するとともに、上原美術館が所蔵する、古代・中世の仏像の全てを展示いたします。

二天とは、甲冑をつけ武装した二体一対の神。寺の中門や、須弥壇上の本尊や三尊像の左右に立ち、寺院や仏、信仰者を守護する役割を担う神々です。新収蔵の二天像(以下、本像といいます)は、開口する像と、口を閉じる像の二体からなり、像高はそれぞれ135.3cm(開口像)と136.2cm。開口像は、腰を左にひねり、大きく両肘を張って右手を振り上げ、左手は握って左腰前に置き、左足を踏まえ、右足を浮かせてそれぞれ足元に二匹の邪鬼を踏む姿。もう一方の像は固く口を閉じるほかは開口像と同じ姿ながら、腰のひねり、腕と両足の上下など開口像と左右が完全に逆です。二天は四天王の中から二尊を選んで造像するものなので、二天と、四天王の二体のみが残ったものとの区別は難しいのですが、本像は二体で完全に左右対称ですので、もとから二体一対の二天像であった可能性が高いでしょう。なお、二天の組み合わせは、持国天と増長天、持国天あるいは増長天と多聞天が一般的で、広目天は含まないのが普通。本像二体の尊名が気になりますが、持国天と増長天を姿のみで区別することは困難で、多聞天は宝塔を掲げる姿が特徴的であるものの、本像の腕はいずれも後補なので、当初の姿は不明。残念ながら現状では二体の尊名までは明らかにできません。次に本像の年代ですが、上半身に比べて下半身が太く大きいプロポーション、低い三角形の髻の形、忿怒の表情ながらもどこか温和な印象を受ける造形などから、平安時代後期、11世紀末から12世紀の像と考えられます。

ところで、二体は左右対称ながら同じ姿だといいましたが、細部をよく観察すると、甲冑の細部などに違いがあります。例えば両胸を守る胸甲を見ると、閉口像は短冊状の飾りがつきますが、開口像にはありません。また、開口像の下腹部中央には、腰帯を噛む獅噛(帯喰)をあらわしますが、閉口像にはありませんし、両胸の下で革製の甲を緊縛する紐の結び目や



《二天像(阿形)》平安時代、11世紀後半～12世紀



《二天像(阡形)》平安時代、11世紀後半～12世紀



二天像(阿形)下腹部中央にある獅噛



二天像(阡形)胸部にある留め具

留金具の形も両像では異なります。一見同じように見える一組の像なのに、細部が異なるのは、仏師があえてそれぞれの像の姿に変化をつけたのかもかもしれません。そのような点に気が付けば、はるか過去の時代に生きた仏師の創意工夫の一端に触れることができます。

本展では以上ご紹介した二天像のほかに、小像ながら確かな造形力が目を引く平安時代(10世紀)の十一面観音像、繊細優美な平安後期の薬師如来像、深く写実的な衣文と、凛々しい顔が魅力の鎌倉時代の阿弥陀如来像など、上原美術館が所蔵する仏像の数々を一堂に展示いたします。是非ご覧ください。(田島)

まだ夜が残る群青色の街並みの向こうに、太陽の光を受けて浮かび上がる桜島のすがた。錦江湾には鈍い光が満ち、遠くの空も灰かに明るんできています。木々の緑はうっすらとした光を受け、街には間もなく朝が訪れるようです。わずかに赤みを帯びながら闇から姿をあらわす桜島の威容は、人々が生活する時間の感覚を超越した大地の息吹が感じられます。

梅原龍三郎(1888-1986年)は20歳のときにパリに留学してルノワールに師事、滞欧中にはイタリアのナポリを訪ねました。そのときのことを「この辺の海は、大気か何かの関係で色が素晴らしく美しく好きだった。だから山手の街など歩きながら、人がいないと踊り出したいくらい、美しいと思った事がある」とその感激を述べています(『日本現代画家選 梅原龍三郎1』美術出版社、1953年)。そして1921(大正10)年、師ルノワールの弔問のため南仏を訪れた際、再びナポリを訪ねました。噴煙を上げるヴェスヴィオ山の近くで偶然出会った日本人に梅原は「此美感に桜島の景色が似てゐる」(梅原龍三郎「桜島的美感」『天衣無縫』求龍堂、1984年[初出:『日本美術』第1巻第4号、1942年8月]、以下同じ[ルビは筆者])と聞き、その言葉が心に深く残りました。そして13年後、梅原は東京でふと耳にした鹿児島県の民謡・小原節を聞いて「長閑な南国の景色が夢みられ、矢も楯もたまらず行て見度くなり腰を上げた」といいます。それは1934(昭和9)年1月のことでした。東京から汽車で20時間以上揺られて初めての九州の旅、梅原の高揚する気持ちが想像されます。

鹿児島では友人の柳宗悦が紹介した人物の案内により岩崎谷荘に宿泊します。鹿児島市の中央に位置する城山の麓にあるこの宿は「錦帆湾(原文ママ)上に幻の如く浮ぶ桜島の全貌を眺める家」であり、梅原が桜島を描くには絶好の場所でした。その座敷からは「城山を右に眺め山の尾の海に消える辺から桜島が空高くすまひ海が帯のように腰を巻いてゐる」という壮大な眺めが広がります。そして、その風景は梅原にナポリでの体験を喚起しました。「此パノラマが誠にベスピオと



梅原龍三郎《朝暉》1937(昭和12)年 油彩・岩彩、紙 64.6×79.5cm

ソレント半島を一眼に見るナポリの景色にも匹敵する風光である。東に面する桜島は朝青く夕は燃える様に赤い、噴煙は時に濃く時に淡い、朝など濃藍の空と山の間に白く見える事もある。空の色海の色緑の色の光り強く美しき事我國內地に此処に匹敵する処を自分は未だに知らない。その壮麗な大地の美しさを梅原はそう謳っています。以後6年の間、梅原は毎年、鹿児島を訪れては桜島を描きました。桜島を訪れる暁の鈍い暉を捉えた《朝暉》には、地球が巡る大自然の営みさえ感じられるようです。

本展では上原コレクションより、画家たちが描き出す美しき大地の表現をご紹介します。信州・小諸の山並みを独特の明暗で捉えた須田国太郎《農村展望(小諸風景)》や白亜の断崖を柔らかなトーンで描き出したアンリ・マティス《エトルタ断崖》など、大地が織り成す美しい風景をお楽しみください。(土森)

伊豆の地誌『増訂豆州志稿』によると、河津町谷津地区の栖足寺は、元応元(1319)年、僧徳瓊が開き、永享年間(1429~41)、第四代鎌倉公方・足利持氏が再興した寺で、河津町内の臨済宗建長寺派寺院の草分けです。この寺の本尊は等身大の釈迦如来像。本像は、当館が昭和61(1986)年11月に行った調査でも注目され、当時の山根明学芸員は報告書のなかで、「丸い肉髻やおだやかな面相は平安仏を思わせる」と記す一方、鈍い衣文や、組み方が判然としない両脚部の表現などに時代が下る要素が見られると悩み、「一見したときの古仏の印象は捨てがたく、機会を見て再調査することとしたい」と結んでいます。この時は、本像を須弥壇から降ろすことができず、詳細な調査が行えなかったゆえの結論でした。

それから33年の時が流れた令和元(2019)年9月27日、上原美術館は、河津町教育委員会及び同町文化財保護審議委員会の依頼を受け、河津町史編纂事業の一環として、改めて栖足寺の調査に入りました。須弥壇の下から見上げた本像の面貌は古様で、大きく立派です。その一方で、山根氏が言うように衣文は鈍く硬く、体の肉付きがあまりにも平板です。「やはり時代が下る像では」というのが最初の印象でした。等身大を超える仏像は重く、動かすと破損する恐れがあります。そこで、須弥壇から降ろさずに調査を行うと決め、各部の計測のために須弥壇に登りましたが、そこで仏像の左側面を見て驚きました。平板に見えた体は、側面から見ると奥行きがあって量感に満ち、左肩から上腕にかけて深くしっかりとした衣文が刻まれています。これらは平安時代も比較的古い時代の像の

特徴。先程の予定を変更して、細心の注意を払いつつ仏像を須弥壇から降ろし、調査することにしました。

構造を調べるため像底を見て、不協和音の理由が分かりました。本像は頭と胴体の主要部分を、木心を中央にこめた縦一材から造る一木造の像で、別につくった両脚部と台座にかかる両手の袖、組んだ両手首先を寄せていますが、これらの部分は全て後補。ここまでは予想通りだったのですが、胴体部分も、右半身と両胸から腹部にかけての正面半身が朽ち、新たに材を寄せて彫り直していたのです。つまり本像は、頭部と左半身、背中が当初の姿なのですが、この部分の量感に満ちた力強い造形、大きな鬘と小さな鬘を交互に表す翻波式衣文、大きく三角形の鼻と厚い唇が接する面貌などから、平安時代、10世紀の像と考えられます。

本像を伝えた栖足寺の近くには、多くの平安仏を伝える南禅寺があります。伝説によれば、古く南禅寺は山津波にあり、建物もろとも多くの仏像が埋没したといい、現在伝わる26体の平安仏の多くは破損しています。仏像の年代から見て、本像もかつて南禅寺に伝来し、埋没した仏像の一体であった可能性が高いのではないのでしょうか。今後、この説の可否や、本像が大破しながらも修復を経て栖足寺の本尊に迎えられた経緯など、検討すべき



釈迦如来像



釈迦如来像の像底

課題は多いものの、当館の調査で新たに、伊豆から平安仏を見出すことができました。

近代館の展覧会『上原コレクション 名品選3 美しき大地—梅原龍三郎《朝暉》を中心に—』(2020年4月25日~9月27日)では、アンリ・マティス《エトルタ断崖》を出品します。灰色や茶色など穏やかな色彩が主調となるこの風景画は一見、鮮やかな色を用いるマティスのイメージからは少し離れているかもしれませんが、こうした絵にこそマティスの色彩の魅力が詰まっています。

エトルタはフランス北部ノルマンディー海岸の断崖が広がる小さな漁村です。浸食によって削られてできた断崖のアーチは、「象の鼻」や「馬の脚」と呼ばれ、クールベやモネなどさまざまな画家がモチーフにしてきました。マティスは1920年と21年の夏にここを訪れます。それはマティスが50代に入って間もなくのこと、ちょうど色彩が大きく変化する時期です。

マティスは30代半ばで鮮やかな原色で描くフォーヴ(野獣派)の前衛的な画家として広く認められるようになり、40代で《ダンス》や《音楽》(ともに1910年、エルミタージュ美術館)などはっきりとした色彩で大きな画面を彩ってい



アンリ・マティス《エトルタ断崖》1920年
油彩・カンヴァス 38.0x46.3cm

ます。その前衛的な画風は特に先進的なコレクターによって高く評価されました。第一次世界大戦が始まる頃には、色彩とともに黒を大胆に用いた幾何学的な構成の作品も制作します。

そうした画風に転機が訪れたのは1917年末のことです。療養のため一時的に南仏ニースを訪れたマティスはこの地を気に入って、残りの生涯を過ごすことになります。ちょうどニースへ移る前から、マティスの色彩にはアース・カラーや灰色といった柔らかな色彩が登場するようになりました。明暗のグラデーションを作りやすいそれらの色は伝統絵画が多用した色彩でもあります。

色彩の画家と言われたマティスですが、そのはじめは比較的暗いものでした。マティスはベルギー国境近くのル=カトー・カンブレジという町に生まれました。パリよりも北に位置するこの地の光は明るい南仏とは違い、伝統絵画が持つようなやや暗く繊細なニュアンスを持っています。マティスが初めて絵筆を握ったのは遅く、20歳のときです。それは盲腸で入院したときに母親から贈られた絵具箱がきっかけで

した。法律事務所で働いていたマティスは教則本を読みながら絵を描き始め、パリに出てからは美術学校で学ぶ傍らルーブル美術館で古典絵画を模写します。その後、マティスは20代後半で地中海のコルシカ滞時に明るい色を発見し、30代半ばにスペイン近くの

漁村コリウールでフォーヴの絵画を生み出します。マティスは北方の光と伝統絵画に培われた繊細な明暗の感覚を下地として、南フランスの明るい光のもと色彩の潜在力を引き出していったのです。

そうした特徴はこの《エトルタ断崖》に美しくあらわれています。画面にはシャルダンやコローなどフランスの伝統絵画が持つような独特の銀灰色の空気が広がり、断崖は明暗のニュアンスが施された灰色であらわされています。一方でそのトーンの傍に置かれた海岸の黒は、影というより光の感覚を持っています。黒は画面左下のベージュや海岸の茶色などのアース・カラーさえ輝くようにその力を引き出しています。クレメント・グリーンバーグという批評家はこの時期のマティスの色彩を次のように評しています。「ともかくマティスの色彩は非スペクトルの色彩と並置されたり、あるいは絵のどこかにそれがわずかながら配されることで、これまで以上に真珠のような色合いとなった。同じく黒、白、灰色、アース・カラーがスペクトルの色彩そのものように振る舞い始めた。今やマティスは、印象主義の範囲を超えて全てにわたって使用される色彩を一九一六年直後からの数年間に我がものとした」(藤枝見雄編訳『クレメント・グリーンバーグ批評選集』勁草書房、2005年)。まさにエトルタでの作品には、グリーンバーグが評するように全ての色彩が美しく輝いています。そして、マティスのこうした色彩感覚を知ると、どれほど鮮やかな色彩の中にも明暗の息遣いが感じられることに気づきます。それがマティスの絵がもつ不思議な魅力と言えるでしょう。

これからのイベント

学芸員によるギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会の内容について、展示室で学芸員が作品を見ながらお話しします。

日時 会期中の毎月第3土曜日 11:00～(仏教館のみ) / 14:00～(近代館のみ)

会場 上原美術館展示室

参加方法 当日、展示室にお集まりください。 ※要入館券、予約不要

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となる場合がございます。



活動報告

伊豆市ワークショップ

「はじめての日本画体験」2019年12月7日 伊豆市・生きいきプラザ

伊豆市共同企画展「伊豆をめぐる名画」の関連イベントとして、寸松庵というサイズの小さな色紙に岩絵具で絵を描くワークショップを開催しました。当館の日本画教室講師、牧野伸英先生をお招きして開催したワークショップは、キャンセル待ちが出るほどの人気となりました。初めて日本画を描いた参加者からは色を混ぜて塗っていくことが楽しい、また参加したいという声を多くいただきました。

ミニ講座

「マルケとその友人たち」2020年2月22日 当館会議室

上原コレクション名品選2をより深く楽しめるミニ講座を開催しました。近代館で展示されたアルベール・マルケ《ルーアンのセーヌ川》にちなみ、齊藤学芸員がマルケの作品に関するお話をしました。

授業入館

下田市立下田認定こども園 2020年1月24日、下田市立下田東中学校 1月31日、
下田市立稲穂中学校 2月19日

下田認定こども園の園児と、下田東中学校、稲穂中学校の2年生が、美術鑑賞や修学旅行の事前学習で来館しました。園児は絵や仏像を学芸員と一緒に見て回りながら、いろいろな質問を活発にしていました。中学生は、京都・奈良方面で寺院を見学するため、仏像の見分け方を学芸員が解説しました。

出張授業

西伊豆町立西伊豆中学校 2020年1月22日、富士見中学校 1月23日、
松崎町立松崎中学校 1月31日、下田市立稲沢中学校 2月10日

当館学芸員が京都・奈良方面に修学旅行へ行く中学生に、仏像の見分け方や見るポイントをお話しました。

講演

「静岡県文化財等救済支援員ステップアップ講座」2019年12月7日 静岡県庁
静岡県で行っている災害発生時の文化財の被害報告や、応急措置を行うボランティアである文化財等救済支援員の講習会で、田島主任学芸員が講演を行いました。文化財を知ることには守ることにもつながっていくというテーマで、地域の文化財への関心をもつことの大切さをお話しました。



上原美術館アトリエが完成しました



おとなの日本画体験
(2月8日、講師：牧野伸英先生)



親子で色あそび—透明水彩で
(2月16日、講師：小野憲一先生)



おとなのデッサン・ワークショップ
(2月19,20日、講師：小野憲一先生)

上原美術館の第1駐車場前に一軒の和風建築があります。ここはかつて蕎麦などを提供するレストラン「だるま茶屋」でした。「だるま茶屋」は残念ながら2006年に閉店、その後、上原美術館仏教館のリニューアルにともない、美術館でこの建物を取得し、工事中の仮事務所として使用しました。

そして2020年1月末、この建物は上原美術館の教育普及棟「上原美術館 アトリエ」として生まれ変わりました。レストランのキッチンや座敷があった1階をバリアフリーのワンフロアとし、壁は白一色に統一しました。壁面にはピクチャーレールを設置、ベース照明の周りにはライティングレールを配して、あらゆる光環境を作り出すことができます。また部屋のすぐ近くには水場を設置し、制作系ワークショップに適した環境になりました。

2月8日には早速、冬のワークショップ「おとなの日本画体験」を実施、18名の方々が制作を楽しまれました。外光が入るアトリエの空間は、これまで会場としていた近代館会議室とは少し違った開放感があります。2月16日にはワークショップ「親子で色あそび—透明水彩で」を実施、汚れもふき取りやすい床なので、こどもの参加者も自由に絵を描いていました。2月19日と20日には、「おとなのデッサン・ワークショップ」を開催しました。

2月25日から29日は仏像彫刻教室の作品展、3月3日から7日までは写経教室の作品展を開催しました。多くの皆様に美術をより身近に感じていただけるようになります。

上原美術館では、これからも教育普及活動に力を入れていく予定です。この新しく改修された上原美術館アトリエがその拠点になればと考えております。

(土森)



仏像彫刻教室 生徒作品展
2020年2月25日(火)～2月29日(土)



写経教室 生徒作品展
2020年3月3日(火)～3月7日(土)

*4月から一部教室もアトリエにて開催予定です。

伊豆だより



今年の冬は暖かな日が多く、伊豆に春を告げる河津桜も2月中旬には、すでに満開に近い開花でした。美術館隣の向陽寺の敷地に植わる桜も、見事な花を咲かせていました。少し早い春の訪れだったため、桜はそろそろ終わりになりますが、美術館から西へ向かい、^{ぼさらとび}娑婆羅峠を越えた松崎町では、今年も休耕田を使った花畑のイベントが開催されています。アフリカキンセンカや矢車草、金魚草など数種類の可愛い花が5月初旬頃まで楽しめます。この花畑がある近くの地域で、当館で寄託している吉田寺・阿弥陀三尊像(鎌倉時代・静岡県指定文化財)が守り伝えられてきました。4月25日から始まる展覧会では、このお像も登場する予定です。(櫻井)

展覧会コラム



「モネとマティス—もうひとつの楽園」

2020年4月23日(木)～11月3日(火) ポーラ美術館(神奈川県箱根)

ジヴェルニーに自ら庭園を築いたモネと、南仏ニースのアトリエを調度品で装飾したマティス。二人の画家はそれぞれが創り出した「楽園」を通じて、美しい絵画の数々を生み出しました。本展はモネとマティス、一見すると対照的な二人の画家を「楽園」というキーワードのもとに捉え直し、その芸術の本質に迫る初の試みです。展覧会にはモネの睡蓮シリーズが11点出品されるほか、マティスの油彩画が30点ほど出品されるなど、国内でも稀に見る充実した内容となっています。当館からは、モネの庭園近くの川岸を描いた《ジヴェルニー付近のセーヌ川》、マティスがアトリエの不思議な空間を描き出した《鏡の前に立つ白いガウンを着た裸婦》を出品します。(土森)



クロード・モネ
《ジヴェルニー付近のセーヌ川》1894年



アンリ・マティス
《鏡の前に立つ白いガウンを着た裸婦》1937年

※最新の開館状況につきましては、ポーラ美術館のホームページをご確認ください

開館状況

新型コロナウイルスの影響により先が読めない状況となっております。当館では3月に開催されるイベント(レクチャーやギャラリートーク、絵画教室と同作品展)は中止いたしました。

上原美術館は3月末現在、アルコール消毒の設置や、受付でのマスク装着などに対応し、開館しております。不安の広がる状況の中で、文化を通じて多くの皆様の安らぎを感じていただければと願っております。最新の開館状況はホームページにて公開しておりますので、ご来館の際にはご確認いただけましたら幸いです。

次回休館日は2020年4月13日(月)～4月24日(金)です(展示替えのため)